

「イエスよ、み国においでになるときは私を思い出してください」

「イエスよ、あなたのみ国においでになるときは、わたしを思い出してください。」

(新共同訳聖書 ルカによる福音書 23 : 42)

復活日までの1週間はイエス様の十字架への最後の道行きを黙想する日々で「聖週」と呼ばれています。聖週は教会暦の中で最も大切な1週間です。聖週は復活前主日、イエス様のエルサレム入城を記念する棕櫚の主日からと呼ばれる日で2つのテーマがあります。一つはイエス様のエルサレムへの入城を記念すること、そして読まれる福音書はイエス様の十字架刑によって息を引き取られることを深く心に留めることです。長い福音朗読があります。

「あなたは今日わたしと一緒に楽園にいる」(ルカ 23 : 43)。磔刑の苦悶を思うと、これのどこが「楽園」なのか。地獄以外の何ものでもないのではありませんか。それにしてもイエスさまの両脇の二人の罪人はとても対照的です。一言でいえば傲慢さと謙虚さといえるでしょうか。と言っても、人間は二つに大別しようと言いたいわけではありません。どちらかへと至る可能性をわたしたち一人一人が持っているのではないのでしょうか。とすると、冒頭の、なぜ楽園なのか、地獄以外の何ものでもないのに、という考えの延長線上には、イエスさまを嘲る方の罪人の「自分と我々を救ってみろ」があるのではないのでしょうか。それは目に見える人間の力しか信じない不遜な態度ということになります。しかし、一方の罪人は「イエスよ、あなたのみ国においでになるときは、わたしを思い出してください」と言いました。わたしを思い出してください。そう言った時点で実は、この人はイエスさまと共にあるこ

ととなったのではないのでしょうか。つまり地獄のような苦痛の中であれイエスさまが共におられる(インマヌエル)ということを受け入れるとき、ひとは楽園にいる、と言えるのではないか。それはまた、この地上での死が最後の終わりではないことが明らかにされたということでもありません。十字架上で息を引き取られるとき、イエスさまが「わたしの霊を御手にゆだねます」(46節)と言い得たのはそのためです。死は彼にとって終わりではありませんでした。「み国においでになる時に、イエスよ、わたしを思い出してください」。神の国に入れてくれ、ではなくて、思い出してほしい。なんとも心に染み入る言葉ではないのでしょうか。わたし(たち)はどうしても言い訳が先に立ってしまいます。他人のせいにしたくなるのが、わたしたちの常です。しかし、当然の報いではないかと言う、その神さまへの素直さ、真っ直ぐさ。そして、「思い出してほしい」、という謙遜。そこにわたしたちは胸を打たれるのではないのでしょうか。もちろん、なかなかその通りに、わたしたちにはいかないかもしれません。しかし、その姿勢つまり信仰はわたしたちの心に留めておきたいのです。

この一人の罪人、この男の姿に、わたしたちはキリストに向かう姿勢を学びたいと思います。そして、そのことをもって、イースターへのわたしたちの姿勢を整えたいと思います。

(司祭 越山哲也)